別記様式（第５条関係）

会議録

<table>
<tr><td colspan="2">会議の名称</td><td>第９回福津市共働推進会議</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催日時</td><td>令和５年７月１４日（金）午後１時００分から午後５時１０分まで</td></tr>
<tr><td colspan="2">開催場所</td><td>宮司コミュニティセンター　多目的ホール</td></tr>
<tr><td colspan="2">委員名</td><td>（１）出席委員　嶋田　暁文、依田　浩敏、奥　弘子、小林　真理、富松　享一、中川　孝晃、三ッ橋美津子、山口　覚、山田　雄三</td></tr>
<tr><td colspan="2">所管課職員職氏名</td><td>市民共働部長　香田　知樹
市民共働部地域コミュニティ課長　石井　啓雅
地域コミュニティ課市民共働推進係長　井上 真智子
地域コミュニティ課郷づくり支援係長　向井　恭子
地域コミュニティ課郷づくり支援係　折居　鈴香</td></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td>議 題
（内　　容）</td><td>・「郷づくり基本構想」の見直しについてのワークショップ</td></tr>
<tr><td>公開・非公開の別</td><td>■公開　　□非公開　　□一部公開</td></tr>
<tr><td>非公開の理由</td><td></td></tr>
<tr><td>傍聴者の数</td><td>―</td></tr>
<tr><td>資料の名称</td><td>・次第
・「これからの郷づくりを考えよう」ワークショップ
・キッカケラボリーフレット</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">会議録の作成方針</td><td>□録音テープを使用した全文記録</td></tr>
<tr><td>■録音テープを使用した要点記録</td></tr>
<tr><td>□要点記録</td></tr>
<tr><td>記録内容の確認方法　委員による確認</td></tr>
<tr><td colspan="2">その他の必要事項</td><td>その他参加者　２８名
※会長及び各委員の了承済み</td></tr>
</table>

審議内容　（発言者、発言内容、審議経過、結論等）
１．会長あいさつ ２．「郷づくり基本構想」の見直しについてのワークショップ 　事務局が配布資料を基に、ワークショップの趣旨を説明。その後、「交付金のあり方」「拠点のあり方」「人財育成・確保」「市の関わり方」のテーマについて、１テーマ２グループの計８グループに分かれ、ワークショップを行った。途中席替え等行いながら、３０分×４回実施した。４回話し合った結果を、各グループの代表が発表した。 委員 　まずは「交付金のあり方」について話し合ったグループに発表をお願いしたい。 参加者 　方向性の「地域の状況を反映した算定基準を目指す」という部分は、皆さんの話を聞いて、地域ごとに状況が異なるというのがよくわかった。戸数、年齢層などの定量的なものはもちろん、 公民館の有無や、地域の面積の広さといった色々な変数を算定基準にどう反映するかまでは、明確な解決策は出なかった。 　「使い方の柔軟性を高めることを目指す」については、配分された予算を、郷づくりで裁量を持って使えるというのが、理想なのかもしれない。他方で、どのように色々な人の合意を得て、どんな基準でやっていくのかという点で難しさがあるという話も出た。これについては、柔軟に使えるターゲットを絞り込んだらどうかというアイデアが出た。交付金は自治会の加入率や活動の活発さによっても、活用のされ方が変わってくる。なるべく自治会の入会者がたくさん増えるような、協議会と自治会の相互理解が深まるような活動に、より柔軟に裁量を持って交付金を使えるような権限があるといいのではないか。例えば、最近は若い世代や集合住宅の方がなかなか自治会に入ってくれないといった話がよくある。他方で、子どもの学校行事や、地域の子ども向けのイベントなどをきっかけに、自治会や郷づくりの活動に関心を持ってもらったというケースもあるようだ。こういった子どもに対する施策には、郷づくりや自治会の自由な予算があるといいのではないかという話が出た。 　「協議会と自治会の納得が得られる配分をする」については、相互理解が非常に重要であるため、コミュニケーションを取ることについて権限と裁量が欲しいというアイデアが出た。今は人が集まる機会があっても、お弁当や飲み物の予算の上限が決まっていると聞いた。せっかく人が集まってくれたのに、そういった交流の機会をうまく活かせないのはもったいない。 会長 　柔軟にする部分とそうでない部分を仕分けしていくというのは、そういう

案もあるなと感じさせられた。一方、子どもの部分で柔軟にするという意見については、仮に子どもをきっかけに自治会や郷づくりの活動に関心を持ってもらえる可能性が高まるとしても、そのことをもって柔軟な扱いをする根拠となりうるのかどうか、判断が難しいのではないかと感じた。

会長
　私どものグループでは、１つ目に、交付金の配分の仕方に不公平感が出ていることについて、考え方を明確にしてほしいという意見が出た。そもそも、配分に関する考え方が、従前の流れの中で決まってきている部分があり、かならずしも合理的な配分方式になっていないようにも見える。
　２つ目に、交付金の配分で頭打ちになっている部分を撤廃してはどうかという意見が出た。特に福間や福間南に関しては人口が多いが、それに対して十分な交付金が入ってきていない。交付金は大きく基礎事業と自主事業の２つに分かれているが、基礎事業の規模加算の部分は、算定基準が３,５００世帯で頭打ちになっている。自主事業の、特に子育て支援、青少年育成に関する事業の部分に関しても、２,０００人で頭打ちになっている。この頭打ちの部分を撤廃していくことで、バランスを取ったらどうかという意見が出た。
　３点目に、別会計を認めてほしいという意見が出た。頑張って稼いだり、色々な寄付を募ったりしても、結局１本の会計に入ることになり、年度末に１００万円を超えた額は返還しなければならず、何の意味もない。頑張ってもその努力が報われないというのはおかしいという意見が出た。
　４点目に、専任事務局員給与の上限撤廃という意見が出た。これまで１８０万円となっており、今年、暫定的にその額を超えてもいいということを行っているが、恒久措置として撤廃していいのではないかという議論があった。
　５点目に、交付金・補助金の流れを一本化してはどうかという意見が出た。子ども会などのいくつかの団体の補助金が、郷づくり推進協議会の交付金とは別々に流れる形になっている。これがお金の流れの縦割りにつながっており、郷づくり推進協議会と他の個別の団体とのつながりが十分にできていないことにもつながっている。そもそも郷づくり推進協議会のような組織をつくることの最大の趣旨は、地域の色々な団体の補助金を一本化し、お金の流れを通じて、ここにつながりを作り出していくというのが普通の眼目である。審議会側としても、郷づくりで交付金として一本化する形を取ることによって、団体とのつながりを作っていただければと思っている。

会長
　先ほど弁当代が７００円以内といった細かなことは決めずに、地域の中で決めれば良いのではないかという話があった。これまで細かなルールを定め、それに違反しているかどうかを細かく行政側がチェックするというやり方をしていたが、本当にだめなことだけを定めて、あとは自由にしていくほうが良いのではないか。例えば弁当代を３,０００円出したときに、地域の中でそれがオープンになっていれば、批判する人も出てくると思う。しかし、地域の中で話し合い、それについて説明ができれば良いのではないか。地域で話し合いながら学び合い、より良い姿を目指していくのが自治である。そ

のため、原則自由にしていくというのが方向性だろう。
　また、今は、１００万円を超えた額については返還しなければならないが、計画を立てたものについては２、３年の積み立てを認めても良いのではないかという意見も出ていた。２、３年の積み立てを認めるとなると、市は債務負担行為が必要という面倒な部分もある。であれば、２、３年分を市から前借りし、翌年度以降その分を減算して配分するといった運用の方がやりやすいのかもしれない。少額の繰越しを認めていくことは、交付要綱に書けばできるため、やっていければと思う。
　これは論争的になるが、郷づくりの会費を取ることにより、郷づくりへの関心が高まるのではないかという意見も出た。しかし、郷づくりのような協議会の肝は、会員を明確にしないということである。つまり、その地域の人間であれば全員がメンバーになるという建付けにすることにより、カバーするところが１つの趣旨である。会費という思想は、メンバーをはっきりさせるということに繋がるため、ここは慎重に考えなければいけない。
　また、自分たちで稼げる仕組みを認めてほしいというのはおっしゃる通りだと思う。具体的な方法としては、別法人を作り、別会計でやっていくというものである。協議会とは別の場所で稼いだものを、協議会の会計に持ってくるというのはなかなか難しいが、別法人で稼いだ部分は別会計で処理すると、別法人から人件費が出せる。しかし、別法人で儲けると税金がかかるため、最終的にプラスマイナスゼロになるような形で運用していく。結局儲かりはしないが、別会計の中で回せるという仕組みができる。簡易な修繕といった、これまでは協議会でしていたものを、別会計でするという形で運用していくのが１つの方法かと思う。他方で、別会計で運用していく際に、不安な部分があると思うため、別会計に関するガイドラインを作っていくのが方法だと思う。市の関わりとして重要なことは、ここは心配だという不安を除去してあげることだ。ガイドラインも、細かく縛るのではなく、このようにすれば大丈夫といった安心を与えるためのガイドラインを作ってはどうか。
　また、各郷づくりが年に１回集まり、共有し合いながら、お互いに刺激し合う仕掛けができあがると良いのではないか。

委員
　続いて「人財育成・確保」について話し合ったグループに発表をお願いしたい。

参加者
　１つ目に、グリップ力を育成、強化していけるような場があるといいのではないかというアイデアが出た。自治会長のようなキーパーソンになる方が、地域にこんな人が住んでいる、こんな人が入ってきたというのを把握しておく。そういったグリップ力は大事ではないかという意見が出た。
　２つ目に、現役世代の人が参加しやすい工夫が必要ではないかという意見が出た。郷づくりの中に、どうしても強制的なイメージがつきまとっているのではないかという問題提起があった。そこを緩やかにしていくために、現役世代が参加しやすい工夫について、アイデアを出し合った。現役世代の人は昼間仕事をしていることもあり、平日の夜や土日などの来やすい日程設定

にすることが、受け入れているという意思表示につながるのではないか。また、色々な役割を細分化し、短時間でできることを増やし、入り口を増やしていくことが大事ではないかという意見が出た。

また、郷づくりの情報発信の仕組みを変えるという意見が出た。例えば、ＳＮＳが苦手という人たちがいたら、それができる人を募集しているという声を上げるというものだが、郷づくりが声を上げるというのはなかなか難しい。キッカケラボは、こういうニーズがあるという声と、こういうのができる人をマッチングするという役割を担っているため、活用できないかと思った。

３つ目に、年に１回でも、全員で何かする日を作ってはどうかという意見が出た。例えば、上西郷郷づくりが行っている西郷川の美化活動のように、郷づくり主催で、年に１回みんな集まれる日を設定したらどうか。一緒に汗を流すことは、シンプルだがすごく大事なことだと思う。そこに楽しさやおまけ感、なにか食べたり、終わった後にみんなで話したりするような場があるといいのではないか。私が住んでいる糸島には区役があり、例えば、神社の掃除などは全員参加で、参加できないときは、罰金を払わなければいけないという縛りがある。私は移住者で、最初はその仕組みに納得できていなかった。しかし、半強制的なものでも、そこに参加して一緒に汗を流していると一体感が生まれ、同じものを共働している感覚が生まれるのを実感している。本当は自主的に参加するようになると良いが、この日は全員参加という日を年に１日作っていくだけでも、郷の中の新たな何かにつながるのではないか。

４つ目に、学校や子どもを巻き込む仕掛けを積極的に打ち出してはどうかという意見が出た。福間南郷づくりでは１０月にフェスタに参加したり、勝浦郷づくりではクリスマスのイルミネーションをしたり、既に具体的に学校と共同で何かしている地域もある。学校や子どもと共同で何かすることが、長い目で見た人財育成・確保につながるのではないかという意見が出た。

また、神興郷づくりでは今年の１０月に竹灯まつりをすることが決まっているそうだ。今年の春に神興小の卒業式や入学式で、以前作成した竹灯を並べ、そこに花を飾ったそうだ。その後、その話を聞きつけた幼稚園や保育園の先生から、竹灯づくりをしたいという希望があり、講習会を開いたそうだ。それを受け、今年の夏に、竹灯づくりの講習会を、郷づくりで企画して呼びかけることが決まっているそうだ。人財育成・確保のためのアイデアとして、講習会を開くというのは考えがちだが、この竹灯づくりの講習会は、人財育成のために始めたわけではない。そもそも、竹灯まつりは、神興を盛り上げるために始まり、その後学校との連携が生まれ、話を聞きつけた人からオファーが入り、講習会を開いたわけである。また、切った竹を置いていたところにカブトムシが寄ってくるなど、思いがけない副産物も出てきたそうだ。この話を聞いたときに、実は皆さんが今行っている取組みの中にも、すでに人財育成・確保に繋がることは無数にあるのではないかと思った。主催者側がそういうことを意識しているかによって、例えば来てくれた人たちへの声かけひとつで、ひょっとしたらこの竹灯づくりの講習会に参加してくれた人たちが、来年度の竹切りに参加してくれるような循環が生まれていく可能性もあるのではないか。人財育成・確保のために何かしようというアイ

デアも大事だが、同時に、今までやってきた活動の中に、人財育成・確保につながるようなことは、無数にあるのではないかと気づかされた。

参加者

まず、交流センターは、郷づくり発足以前から活動する方々の居場所になっているのではないかという意見が出た。そこに毎日通うことを良きとする方もおり、そこに若手が入りにくいのではないかという問題点が出た。

改善案の１つ目は、年齢的な整備が必要ではないかという意見が出た。どの郷づくりでも、７０代以下の役員が少ないと思う。今私は５０代だが、６０代もいて欲しいと切実に思っている。７０代の方は、５０代から見ると、仕事で言うと部長クラスである。何か少し困った時に６０代くらいの係長クラスの方がいると相談しやすい。色々な世代が揃っていると、色々うまくいくのではないか。また、役員の３割は女性、もしくは最低３人は女性の役員が欲しいという発言もあった。

２つ目に、他の団体と上手く連携すれば良いのではないかという意見が出た。実際に福間郷づくりでは、団体とうまく連携していくと、足を運んでくれるようになり、部会員になってくれる方がいたそうだ。小学校の読み聞かせや、不登校児の会の方に貸館したところ、そこから郷づくりへ足を運んでくれるようになったそうだ。

３つ目に、郷づくりの方から、自分たちの名前をアウトリーチしに行ってはどうかという意見が出た。まだ、郷づくりをあまり知らない方が多いため、地域の公民館へ出張して行くのはどうかという話が出た。ただ、以前神興東郷づくりで実際に行ったが、郷づくりに入ってくださいという話を持っていくだけで は、あまり話を聞いてもらえなかったようだ。しかし、防災など何かテーマを持っていくと、皆さん集まってくれるのではないかという意見が出た。

４つ目に、別会計を設け、自由にできる部分を設けてはどうかと言う意見が出た。例えば防災などの必須分野の話は、必ず話し合わないといけない部分である。一方、若手の発想を取り入れるなど、柔軟に出来る部分が別会計であり、そこからは君たちに任せるから自由にして良いという部分があったらいいのではないかという話が出た。

５つ目に、中学生の活用という意見が出た。特にＬＩＮＥはすごく使い勝手が良いため、市で郷づくりＬＩＮＥを開設し、お友達登録を増やすのはどうか。ＬＩＮＥの操作が難しい高齢者には、各郷づくりで地域の中学生がボランティアに来て、ＬＩＮＥの操作方法を教えるのはどうかという意見が出た。

６つ目に、Ｚｏｏｍの活用という意見が出た。５０、６０代の働き世代にも郷づくりを身近に感じてもらうために、Ｚｏｏｍで会議ができるようになるといいのではないか。そしてＺｏｏｍの操作方法についても、中学生に教えてもらうといいのではないかという話が出た。

７つ目に、ＰＴＡ役員と郷づくり役員の人材をチェンジしてはどうかという意見が出た。会則を変える必要があると思うが、郷づくりの役員がＰＴＡ会長をする代わりに、ＰＴＡから郷づくりにスタッフとして来てもらってはどうかという話も出た。

８つ目に、「郷づくり」の名称を変更してはどうかという意見が出た。以前、小学生から、郷づくりは何を作っているのかと聞かれたことがある。「郷づくり」という名前を大胆に変えることで、それって何と話題に上がるのではないか。そこから新しい世代を取り入れてみてはどうかという話が出た。

会長
最後のＰＴＡ会長と郷づくり役員のチェンジは少し難しい気がしたが、その他はできるのではないかと思った。
最初のグループで出たグリップ力の強化で言うと、大学生などが地域の人たちを取材して人物図鑑のようなものを作るという取組みをしている地域もあり、やってみたら面白いのではないかと思った。
また、参加しやすいように細分化し、関わる入り口をたくさん作っていくというのも大事である。多くの人が、一度関わってしまうと引き込まれて、大変になるのではないかと思いがちである。この部分だけで関わっていいというような、限定的に、安心して関われるものをたくさん作っていくことが大事だと思う。
竹灯まつりの話に関連すると、色々な人たちと出会わせていくと、そこから色々な新しいものが生まれてくるという計画的偶発性理論と呼ばれるものがある。人と人との出会いの場を意識的に作っていき、面白い議論をしている人がいれば、その人に刺激を与えて、そこから新しい動きを作っていく。その動きとなるきっかけを見逃さないということを意識した上で、人との出会いの場を作ることは、すごく有効ではないかと思った。
連携団体とつながるという話で言うと、個別の人間を探すのではなく、まずは団体とつながり、その団体に所属している人や、団体と関係している人と間接的につながっていくというのは大事なのではないかと思った。
また、度々話に上がる「郷づくり」という名前の変更は、ぜひ実現したいと思った。

委員
続いて「拠点のあり方」について話し合ったグループに発表をお願いしたい。

委員
拠点の在り方について話し合ったが、各郷づくりで実情が異なるため、同じ解決策は難しいと感じた。
まず、交流の場所としてどうしたらもっとハードルを下げられるか、ちょっと行ってみようと思えるとか、そこで過ごしてみようと思える場所にするために何かできないか話し合った。シャワーがあって泊まれる、泊まりがけでイベントができる、お酒を飲めるように飲食の範囲をもっと広げたい、営利目的のイベントも開催できるような余地を与えてもらえないかといった意見が出た。
また、夜間も利用できると、色々な方が利用できるようになり、利用の幅も広がるのではないかという意見が出た。しかし、この幅をどこに出してい

きたいかは、郷づくりによって異なるため、郷づくりから、こういう利用はできないかというリクエストをもらいつつ、それに対し、市が柔軟に応えていくような方法はできないかという話が出た。コロナ禍で非常につながりが作りにくくなっており、改めてもう一度イベントをやろうとすると、それ自体を負担に感じる方がかなり多くいらっしゃる。イベントをするためのハードルを下げるという意味でも、施設の使用の基準を下げ、柔軟に活用できないかという話があった。

子どもや若い人に来てもらいやすくするには、漫画やゲームを置いた場所にしていくのはどうかという意見も出た。また、転入者が、市役所に聞きに行くのはハードルが高いが、ちょっと聞きに来られるような場所にしていくとすれば、郷づくりの方だけでは答えられないこともあるため、市の職員にもう少し定期的に来てもらえる、もしくは郷づくりをサポートするような機能があると助かるという意見も出た。

また、交流センターの駐車場の数が少なく、遠方の方が来られないため、ミニバスやＩＴを利用してアクセスしやすくならないかという意見が出た。併せて、交流センターの鍵の管理についても、ＩＴを利用して効率化を図れないかという意見が出た。

参加者

５つのアイデアが出た。最初の３つは、人により一層関わってもらうためにはどうすればいいか、認知・広報という話である。

１つ目に、郷づくりごとに愛称を付けてはどうかという意見が出た。正式名称で呼ぶと長かったり、分かりづらかったりするという声もある。正式名称を変えていくのは難しいため、各郷づくりで愛称をつけていくのはどうか。例えば、津屋崎に「ふくつまる」というラーメン屋ができたが、そこは子どもたちが一緒になってお店の名前を考えるということをしていた。各郷づくりの子どもたちと一緒に愛称を考えるといったことができると、愛着も湧いて面白いのではないか。

２つ目に、福津市の公式ＬＩＮＥで、定期的に各郷づくりの広報をしてはどうかという意見が出た。自分たちでＳＮＳを使用して情報発信というのはなかなか難しいため、市の公式ＬＩＮＥを利用して、転入者の多い４月や夏休み時期などに、郷づくりについての情報を定期的に出してはどうかという話が出た。

３つ目に、郷づくりに展示コーナーのようなものを設けてはどうかという意見が出た。例えば、キッカケラボでは、コミュニティスクールでの取組みの成果物を展示したら、今まで来られたことがない３０代、４０代の方が来てくれたというのが実際にあった。期間限定で自由研究のような成果物を展示するようにするだけでも、接点が増える。スペースがあればできるようなことをするのはどうかという話が出た。

残りの２つは、拠点の管理として、使いやすくするためにどうしたら良いかという話である。

４つ目に、管理条件の勉強会のようなものをするのはどうかという意見が出た。お金の管理や飲食のことなど、色々な条件があると思うが、何がだめで何が良いのかというところが、市と郷づくりでずれているところがあるの

ではないかという話が出た。例えば、飲食できるようにしたいという話になった時に、すごくアグレッシブに考える人は、食品衛生責任者がいれば良いのではないか、いなければ資格を取ればいいのではないか、という話やアイデアも出てくるかもしれない。

５つ目に、利用の申込みを一括管理できないかという意見が出た。ある郷づくりでは、市が管理する部屋と郷づくりが管理する部屋があり、面倒だという地域があった。自分たちが責任を持ってするので、ある意味任せてほしいというという思いもあるようだ。お金の管理等も含め、一括管理になれば、更に使いやすくなるのではないかという話が出た。

郷づくりによっては、子供が和気あいあいとして、日常的に地域の人が利用できる場所を目指していきたいという声もあった。先ほど挙げた５つのことをやってみると、少しでもそういう場所に近づくのではないか。

会長

お金がかかってしまう駐車場の話については難しい部分があるが、基本的に参考にさせていただきたいと思った。

飲食の範囲については、整理する必要があると思っており、行政の建物であるから飲食やアルコールは禁止というような法律はないはずである。公民館や公民館類似施設は、社会教育法により制限されるが、そういう位置付けにしていなければ、法制的な制約はかからないため、整理できるかもしれない。そこは確認したい。

営利目的に関しても、これまでなんとなく社会教育施設というイメージがあり、営利目的をかなり厳しく考えてきたが、福岡市をはじめとして、地域のためになるような営利活動であれば認めていくという運用をしている自治体も少なからずあるため、打破していけるのではないかと思う。

夜間利用や施設の利用に関して言うと、指定管理者制度のようなものを入れていくと、申込みの一括管理を含め、もう少し柔軟に使えていくのではないか。指定管理者が裁量を持って運用できるような指定管理を取り入れれば、この問題は解決できるのではないかと思っている。

愛称を付けるのも良いと思う。漫画やゲーム、鍵の管理については、地域で工夫できる部分であるため、答申に入れる内容ではない感じがした。しかし、こういったものを置いてはいけないと市から要請されているとすれば、そこは規制緩和できるようにしていきたいと思っている。

委員

続いて「市の関わり方」について話し合ったグループに発表をお願いしたい。

参加者

改善策やアイデアが出るというよりも、皆さんが今まで胸の中に溜めていた思いや怒りがたくさん出た。

まず、この場の進め方についての提案をしてほしかったという意見が出た。また、市が用いる言葉は抽象的や独特なものが多く分かりにくい部分があるという意見が出た。これに対しては、すぐ近くにいた事務局に説明を求

めると、答えが返ってきた。ちゃんと聞けば分かるということは、最初からもう少し丁寧な説明や、分かりやすい説明があると良いという話が出た。

また、時間がかかるというキーワードが出てきた。困りごとがあって相談するときに、相談後の回答やアクションまでに時間がかかる。市としては、どの課に話をしなくてはいけないとか、それを判断するまでにいくつかの過程を踏んでいかなければいけないから時間がかかると思うが、それに対する不満かあるようだ。また、予算の関係もあり、時間がかかってしまう。これに対して、「すぐやる課」など早急に対応できるような、別の窓口があれば良いのではないかというアイデアが出た。そして、できれば市の中にあると嬉しいという意見が出た。

他方で、市が郷づくりに自由度を与えてくれているのではないかというポジティブな話も出た。例えば市の方針がはっきりと分かりにくいという不満に対して、自分たちはどう動いていいかわからない、動きにくいというような声もあるが、それを前向きに捉えると、市は郷づくりに、ある程度の裁量を渡し、自由度を与えてくれているのではないか。郷づくりは、全部を市に決めてもらわないと動けないというようなところではなく、自分たちで考え、自分たちで動ける郷づくりであったほうがいいのではないかという意見も出た。

また、自治会未加入者について、市としては、市が自治会に入らない人に声をかけるよりも、郷づくりや地域に近い人が声をかけたほうが自治会に入ってくれると思っているのではないかと考えるが、それは違うと思うという意見が出た。

また、市の職員全員に、８つの郷づくりについて知っていてほしいという意見が出た。郷づくりの担当課や地域を担当している課はあるが、できれば市の職員全員に、８つの郷づくりは特徴があり、やっていることも全部違うということを知っていてほしいという意見が出た。難しいかもしれないが、年に１回でもそういった話ができるような会議を持つということがあってもいいのではないか。これに対するアイデアとして、人事評価につながるようなものを市で考えることはできないかと言う意見が出た。例えば時間外に郷づくりに行くとなると、時間と手間がかかり、それができる人できない人もおり、考え方も様々である。そこで、加点のポイントや、仕事として扱ってもらえるような制度を考えられないかという話があった。郷づくりのことを市の職員全員に知っていてほしいという思いの根底には、市の皆さんが自分たちのそばで伴走や支援をしてもらえるということが、安心するという思いがあるようだ。

また、コミュニケーションをとるという場は今までも何回もしてきたではないかという意見も出た。市の関わり方について今ここで持ち出しているが、分かっている話ではないかという声もあった。しかし、私が話を聞いていると、お互いに同じ言葉１つでも、理解や解釈の仕方にかなり差があるのではないかという気がした。大変かもしれないが、もつれてしまった糸や、お互いに持ってしまっているイメージについて、話し合いの場だけで終わらせず、実際に形にしたり仕組みにしたりすることが大事なのではないかと思った。

参加者
　具体的なアイデアはあまり出なかった。
　１つ目に、職員が異動になる度に、郷づくりが新しい職員に説明をしなければいけないという意見が出た。職員は担当業務以外の知識が少なく、意見の交換があまりできないため、もったいないと感じているようだ。この改善案として、新入職員や定年退職後のＯＢを対象に、研修として１年くらい郷づくりに行ってもらうという案と、地域で活動している人に専門職員として頑張ってもらうという案が出た。要するに、知識のサイクルを回していくことが必要である。専門的な知識も必要だが、基本的な知識としてみんなが持っており、みんなで共有できる環境を作り上げることが大事なのではないか。
　２つ目に、知識・情報について意見が出た。まず、市長と郷づくりの会長の懇話会を開いてはどうかという意見が出た。郷づくりが要望を出しても、回答が返って来ないまま企画が進んでいたということがあったようだ。言いっぱなしにならないことが重要であるため、意見交流する場を設け、自分の認識がどうなっているのかということを共有するべきではないかという案が出た。カフェやお茶会のようなイメージで、市長、会長、職員、郷づくり役員が集まり、行政と郷づくりという立場ではなく、人と人で話すということも大事なのではないか。
　また、職員の情報をフィードバックしてほしいという意見が出た。例えば、職員がこういうことを学んだ、こういう知識を得たというのを、郷づくりにもフィードバックしてもらえると、職員はこういう知識を持っているのだ、こういう認識があるのだということが再確認できるという話が出た。
　また、郷づくりについて知らない人が増えているという意見が出た。郷づくりを知らない人が増えているということは、関心が薄いということにつながりかねない。郷づくりの存在意義とは何かを再確認することが必要ではないかという話が出た。
　３つ目に、郷づくりは市の下請けのようになっているのではないか、そして自治体自体も、負のスパイラルに陥っているのではないかという意見が出た。まず、自治会や郷づくりに関するパンフレットがない。そしてパンフレットがないということは、自治会への加入者が少なくなる。自治会への加入者が少なくなるということは、運営資金が減る。運営資金が減るということは、市に頼るしかなくなる。それを解決するために外部のお金を得る手段が必要なのではないか。しかし、現状の制度では、お金を稼いでも、交付金を返還しなければならないなど、やってもあまり意味がない。そういった仕組みをどうにかすることが先ではないかという話が出た。
　市が方向性を決めて示してくれると、郷づくりも動きやすくなり、知識を得たりできるが、それが前提として無いため、郷づくり側もどうして良いのか分からないのではないかと思った。資料を見ても、今自分たちがどの位置にいるのか分からないということが問題ではないかと思った。

会長
　先ほどの拠点のあり方についてのコメントに補足すると、市役所に直接聞きに行くのは大変だから、聞きに来られる場所にしていったらどうかという

話は、実現可能性としては十分あり得る。事務局員の方がコーディネーターのような形で、市役所とオンラインでつないであげて、その場で相談できるようにしていくという方法は１つあると思う。

市の関わり方について、まず申し上げておきたいことは、市からの回答やアクションに時間がかかるということはご理解いただきたい。お金がかかることなどは時間がかかってしまうのは仕方なく、色々な関係部署とも調整が必要になってくる。そもそも行政の対応がスムーズにいかないのは、ある方向で進めていった際に、別の市民からクレームが入ったりすることがないように、いろいろと押さえておく必要があるためである。

市民が色々行政に言っても、行政は聞いてくれないという話になりがちだが、行政からすると、何もかも持ち込まず、そこは市民同士で話し合ってもらいたいというのは多分にあると思う。となると、実は「すぐやる課」を作るのではなく、市民同士で対話するということが大事なことなのではないかと思っている。そこはぜひ考えていただければと思っている。

ただし、一方で行政に要望しても行政が回答せずにうやむやになってしまうのは良くない。行政手続法（条例）という、いつまでにどういう手法で回答するといったルールがあるため、そういったものを活用していきながらやっていくというのも一つの手ではないかという気がする。

また、市が方向性を決めて示してくれれば、という話については、審議会で各郷づくり推進協議会を回らせていただいた際にも、もっと市に方針を示してほしいとか、かっちりと決めてほしいという話がでてきたが、それは自らの首を絞めるのではないかと思っている。やはり自治であるため、市が決めた方向で動くというのではなく、自分たちで決めていく。

ただ、恐らく、方針を決めてほしいと言われた方も、指示を出してほしいわけではないのではないか。そうではなく、求められているのは、先ほど話した別会計に関するガイドラインのように、ここに踏み込んで大丈夫かといった、不安がある部分について、市としてきちんと方針を示してほしいという意味ではないかと思う。そのため、市の関わりとしては、ここから先に関しては気をつけて、ここからはこうしても大丈夫だという部分を示していくことが大事である。

各郷づくりの状況は異なり、かなり活発に動いている地域、人口減少の中で苦しんでいる地域など状況は様々なため、状況や段階に応じて、きちんと伴走支援をしていかなければいけない。その部分がきちんとできていないため、市の関わりとして、言いっぱなしになっていると思われがちで、自由にどうぞと言われると、何をやっていいかわからないという反応に繋がっているのではないかと思う。あくまで方針は地域で決めていくべきで、それをバックアップしていくのが市の役割だと思っている。そこの部分の役割分担が十分にできていないのではないかという気がする。

次に、人事評価で勤務外のことを評価してはどうかという点については、難しいのではないか。人事評価というのは勤務時間中の評価が大原則になってくる。奈良県の生駒市のように、勤務時間外のことも、間接的に考慮しようと動いている自治体も現れてきているが、全体としては、やはりそれはやってはいけないのではないかという意見の方が多い。

ただ、職員全員が郷づくりのことを知り、理解するための方策を打ってい

くということは大事である。先ほど出てきた自慢大会のような場に、職員ができるだけ参加するといったことである。
　地域担当職員に研修をするという話があったが、実は現在もそういった仕組はあるが、その運用が上手く回っていないのではないかと感じる。地域担当職員制度のあり方を見直していきながら、研修として関わっていく部分はしっかりやりつつ、他方で、人事異動に伴い知識が途切れないように、複数で関わっていく。重ね合わせていきながら、きちんと継承されていくような仕掛け作り、知識のサイクルを回していく必要性については、おっしゃる通りだと思った。
　また、首長との意見交換や、対話の場というのは本当に必要と思っている。審議会のメンバーには郷づくり推進協議会の方もおり、郷づくりの訪問は、行政と郷づくりとの関係だけでなく、郷づくりと郷づくりの対話の場にもなり、非常に意味のあるものであった。
　今後、審議会の答申の中に、先ほど出た自慢大会以外にも、お互いの郷づくりを訪問し、悩みなどを共有し合うような横のつながりの場を作っていければという内容を入れたいと思っている。
　答申を出して終わりではなく、引き続き進捗状況を確認させてもらいながら、私たちが媒介となり、市と郷づくり推進協議会との取り結びもしていきたいと考えている。

委員
　少しでも現実に即した改善をしたいという思いがあり、少々長い時間だがやろうという決断を下し、この会議をさせていただいた。会長が最後に述べられた通り、これを答申としてまとめていく材料にして、かつ我々はその後もずっと一緒に伴走していける立場にもなりたいという思いがある。ぜひ一緒に作っていきたいと思う。

３.その他
委員
　それでは、以上で本日のワークショップは終了とする。